研究ノート

看護専門学校生の学業継続に影響する要因

住谷　圭子[1)]，甘佐　京子[2)]，松本　行弘[2)]，山下真裕子[3)]
[1)]近江八幡市立看護専門学校
[2)]滋賀県立大学人間看護学部
[3)]神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部看護学科

背景　2013年から過去５年間、看護師養成所の入学者のうち約3300人（15％）が留年、休学、退学している[1)]。約６割の学生が「学校を辞めたいと思ったこと」があると回答しており、臨地実習・対人関係・日々の学習上の課題等に多くの学生がストレスを感じているとの報告がある[2)]。看護基礎教育在り方検討会において日本看護協会では看護師の養成・確保の３つの観点のひとつとして「看護学生の退学者の防止」を挙げている[3)]。
目的　看護専門学校生の学業継続に影響する要因を明らかにする。
方法　看護専門学校卒業後の新人看護師13名に学業継続に影響する要因についてインタビュー（半構造化面接）を実施した。収集したデータは、内容を質的に分析し、コード化し、類似した項目ごとに集約し、カテゴリーを抽出した。
結果　学業の継続が困難と感じた要因（体験）と学業継続を支えた要因（体験）の２つに分けられた。全コード数305のうち、学業困難体験は15のサブカテゴリーから、３つのカテゴリー、【実習を通して感じた困難な体験】【日々の学習を通して感じた困難な体験】【学生生活を通して感じた人間関係の困難な体験】が抽出された。学業継続を支えたと感じた要因は、20のサブカテゴリーから、３つのカテゴリー【自己の気持ちの持ち方】【自己の行動の工夫】【支援してくれた人の存在】が抽出された。
結論　看護専門学校生の学業継続に影響する要因は、学業継続が困難と感じた要因と学業継続を支えた要因があった。学業継続を支えた要因には、自己の気持ちの持ち方と行動、支援をしてくれた人の存在が必要であった。
キーワード　看護専門学校生、学業継続、学習支援

Ⅰ．緒　言

近年、看護学生の留年や退学が増加し続けている。過去５年間の看護師養成所の学校数は482校（2007）から、500校（2012）と増加している。しかし、入学者の数は24092人（2012）に対し、卒業者数は20806人となり、入学者の15％(3286人)が留年もしくは休学、あるいは退学していることが推測できる[1)]。看護師養成所に入学した学生の１割が退学し、退学率は、約１割を占める。また約１割弱の学生が留年している。休学後に退学する学生も増えている[2)]。看護学生の６割以上が「学校をやめたいと思ったこと」があり[3)4)]、その理由は、看護師の適性や自己の能力などがあげられ、学校を辞めようと思った看護学生（看護専門学校３年課程）は、全学年の６割以上を占める。看護教育のカリキュラムの過密さがあり、その中でも実習記録が大変、課題が多いなどの実習

The factors of program completion among Nursing Students in Nursing Traning Schools.

Keiko Sumitani[1)], Kyoko Amasa[2)], Yukihiro Matsumoto[2)], Mayuko Yamashita[3)]

[1)]Nursing School of Oumihatiman municipal,
[2)]School of Human nursing ,The University of Shiga Prefecture
[3)]Kanagawa University of Human Services, Faculty of Health& Social Services School of nursing

2014年９月30日受付、2015年１月９日受理
連絡先：住谷　圭子
近江八幡市立看護専門学校
住　所：滋賀県近江八幡市江頭町983
e-mail：hachmans@zc.ztv.ne.jp

の困難さや、授業が難しい、教員、家族との関係などがある[5]。退学や留年となった原因の一つには、臨地実習が不合格となり、単位未修得となったことがあげられる。看護学生が入学後、学生生活で最もストレスを感じたことは臨地実習、次いで対人関係、日々の学習上の課題がある[6]。また、看護学導入時期に学生が感じる困難性として,【今までとは異なる学習方法】、【慣れない環境】、【科目の位置づけの認識不足】、【学習資源の不便さ】、【看護学に対する学習意欲，動機づけの違い】があげられている[7]。看護学生の学習に関するストレス、特に実習に関する不安やストレスなどは多くの報告がある[8]。看護学生の学生生活で学生が最もストレスに感じたことは、対人関係、学習、実習が上がっており、その中でも特に実習という意見が多くある[9]。看護学生にとって、臨地実習は、履修上最大の課題であり[10]多くの研究者が看護学生の学習上の危機について臨地実習の存在を挙げている[11]。臨地実習が不合格になり留年となった学生がどのようなプロセスを経て、看護師になることができたのか学生の体験に関する研究[12][13]がある。そこでは、学業を継続することを支援する家族や友人、教員の存在が挙げられている。また、学校をやめたいという気持ちを実習の中で乗り越えた報告もある[14]。

2009年の看護基礎教育在り方検討会で日本看護協会が提示した【今後求められる看護師の資質と教育～20年後の看護師確保の観点から～】[15]では看護師の養成・確保の在り方の３つの観点に、入学者の確保、早期離職の防止、そして退学者の防止を挙げている。看護学生は在学中に多くの困難や課題に直面し、ストレスの多い状況にある。しかし、困難を感じつつもそれを乗り越え、多くのことを学び、入学生の約９割の看護学生は、卒業に至るまで学業を継続することができている。困難要因に着目した先行研究はみられるが、困難状況を乗り越えるに辺り、具体的に何が支える要因になったのかに焦点をあてた研究はみあたらない。学生の学業継続を支える要因を明らかにすることは支援方法を検討する上で重要な示唆を得ることができると考える。そこで、看護学生の学業継続に影響する要因を明らかにし、支援方法の一助とする。

Ⅱ．研究目的

看護専門学校生の学業継続に影響する要因を明らかにする。

Ⅲ．用語の操作的定義

学業継続に影響する要因：看護学生が在学中、学業を続けることが難しいと考えたとき、それを乗り越え、卒業要件を満たすまで、勉学を行うことに影響する要因と定義する。この要因は学業を継続することを支えることに影響する要因と学業の継続が困難になることに影響する要因に分けられる。

Ⅳ．研究方法

１．研究デザイン　看護専門学校生にとって学業の継続に影響する体験を明らかにし理解するために質的記述的研究とする。

２．研究参加者

専門学校を卒業した卒後１年目の看護師　13名

１）対象の選定理由　学生時代の在学中に学業継続に影響する体験を色濃く鮮明に覚えている卒後１年目の専門学校卒業の新人看護師を選定した。

２）選定方法

各研究協力施設の施設長及び看護部を通し文書にて研究参加者を募った。

３．調査内容（インタビューガイド）

学業継続に影響する要因：

学生時代に学業の継続が困難であると感じた体験の有無と感じた時期及び内容、どのように乗り越えていったか、乗り越えていくのに必要なもの（こと）、学業継続を支援してくれたもの（こと）

４．データ収集

１）調査期間：平成24年９月~12月

２）調査方法：インタビューガイドにそって、半構成面接を実施した。実施回数は１人につき１回、所要時間は30～60分程度であった。なお、参加者の承認を得て、インタビュー内容をICレコーダーに録音した。

３）調査場所：対象者の指定する場所に出向き、本人のプライバシーが確保できる個室で、インタビューを実施した。

５．データ分析方法

ICレコーダーに録音したインタビュー内容から逐語録を作成し、コード化し、似た意味合いを持つコードをカテゴリー化した。

６．倫理的配慮

研究者が研究協力施設の施設長宛へ、口頭ならびに文書で、また個人の研究対象者へは文書で研究の意義、目的、方法、予測される結果や危険などについて、口頭および文書により十分な説明を行い、理解を得た上で研究

の協力に同意を得られたものを対象者とした。インタビュー内容は、本人の同意を得、ICレコーダーに保存した。取得した個人情報は、管理と制御を行った。本研究は研究者の所属する機関の研究に関する倫理審査会の承認を得て実施した。(平成24年９月承認番号306)

１．対象者の基本属性（表１参照）

専門学校卒業後１年目の看護師13名にインタビューを実施した。年齢幅は21～34歳で、平均年齢は26.3歳であった。性別の内訳は女性10名、男性３名であった。

現在の勤務病棟は外科系病棟３名、内科系病棟３名、重症心身障害児施設２名、精神科病棟４名、老人保健施設１名であった。

表１　対象者の基本属性

項　　目		結　果
年　　齢		26.3　歳±
性　　別	男　　性 女　　性	３名 10名
勤務病棟	Ｏ ″ ｎ ａ ″ ｎ ａ ｄ ｓ ｛ ， ＿ ″ ａ Ｖ ｛	Ｒ… Ｒ… Ｑ… Ｓ… Ｐ…

２．インタビュー内容の結果および分析

インタビューガイドにそって収集したデータを質的に分析した結果、学業継続に影響する要因として、学業の継続が困難と感じた要因（体験）と学業の継続を支えた要因（体験）の２つに分けることができた。

１）学業の継続が困難であると感じた体験

収集したデータを質的に分析した結果、全コード数305のうち、学業継続が困難だと感じた体験は、15のサブカテゴリーに分類された。さらに、サブカテゴリーから、以下の【実習を通して感じた困難な体験】【日々の学習を通して感じた困難な体験】【学生生活を通して感じた人間関係の困難な体験】の３つのカテゴリーが抽出された。

各領域のカテゴリーは【　】で囲み、サブカテゴリーについては[　]で囲んだ。また、生データは『　』で囲み、斜め文字とした。

（１）【実習を通して感じた困難な体験】

このカテゴリーには、以下の５つのサブカテゴリーが存在した。

①　[実習中の睡眠不足]

『全然寝れず、実習に行っていた、最後の一年はしんどかった。記録やって寝れない。』　『実習中は寝れずにきつい。最初の１週間は寝れない。次の週は少しは寝れる。』　『眠れない、記録もあるし。大変やけど、やることだけやって睡眠時間をとっていた。』『実習中は記録で体力を使う。朝も早起き、２時間の仮眠で、今思うとよくやったと思う。』

②　[実習中の課題の多さ]

『専門の実習が大変。最後の年の中間ぐらい。もうしたくない。実習が、一番しんどかった。』　『実習がしんどい。くらべものにならないくらいしんどい。苦手な領域が、母性が大変でした。』　『実習の提出物の多さ。患者さんの疾患の勉強。アセスメント、膨大な課題。』　『実習中が一番しんどい。時々辞めたいと思ったことがある。課題が多い。』

③　[実習中の緊張感]

『実習先で緊張する。居場所がなかった。』『学生の居場所がない。』

『病院、病棟によって雰囲気が違う。』『病棟によって学生の受け入れが違う。』

④　[実習中の人間関係]

『実習は人との関係のタイミングが合わないとうまくいかない。』

『グループメンバーによってモチベーションが下がる。合う人、合わない人がいた。』

『実習は人が相手なのでどうあがいてもあかんときもあった。』

⑤　[実習指導の厳しさ]

『実習中に怒られ、自分には看護師は向かへんと思った。辞めようと思った。』

『指導者さんは、厳しいし、知識をいっぱいもってらして、これはどうなの？といわれても応えることができなかった。』

（２）【日々の学習において感じた困難な体験】

このカテゴリーには以下の６つのサブカテゴリーが存在した。

①　[テストの多さ]

『学校の勉強は、勉強した後、テストの繰り返し、ばっかりだった。』

『２年生は、テスト三昧。寝れない。後半はテストと看護過程。』

②　[専門科目の難しさ]

『１年生の３ケ月目がいやだった。専門的な勉強が始まり、これが続くのかと思った。やっていけるのかなと思った。』

③　[勉強に集中できない]

『関連図書けへん。壁にぶつかる。ひきずりながら３年に行く。』

『勉強は歳いってる分、頭に入らなかった。』

④ ［座学が続く時期 ］

『座学は１年生が大変　座ってきくばっかり、疲れました。』

⑤ ［他の学生への劣等感 ］

『自分がどんだけサボってきたか　今になってわかってくる』

⑥ ［国家試験への不安 ］

『国家試験の勉強も大変。プレッシャー感じる。』

（３）【学生生活を通して感じた人間関係の困難な体験】

このカテゴリーには以下の４つのサブカテゴリーが存在した。

① ［友達との関係 ］

『同級生でも何人も辞めた人がいる。自分がなんでこの道をめざしたのかうっすらしてたように思う。』

『大半は、実習でつまずき、辞めた友人がいる。』

『実習で辞めていく人もみてきた。自分も無理かなと思った。』

② ［教員との関係 ］

『学校は厳しかった。学校の先生は厳しい。結構厳しい。』

③ ［家族との関係 ］

『高校に入るときは、美容関係に行きたかった。親に勧められた。』

『親が病気で病院に行って大変だった。家のこととかせなあかんし、』

④ ［指導者との関係 ］

『実習では、指導者さんの意見が違い、困った。』

２）学業の継続を支えた要因

学業の継続を支えた要因については、20のサブカテゴリーが抽出され、そこから【自己の気持ちのもち方】【自己の行動の工夫】【支援してくれる人の存在】の３つのカテゴリーが抽出された。

（１）【自分の気持ちのもち方】

このカテゴリーには以下の５つのサブカテゴリーが存在した。

① ［気分の転換を図る］

『趣味に没頭する。実習中はしんどかって、燃え尽きてる時は趣味に没頭する。』　『遊べる時は遊ぶ。休む時は休む。気分を変えてリフレッシュする。』

② ［自分を励ます］

『人間やればなんでもできる。向いてないなと思ってもなんとかなる。』

『自分でやればなんでもできる。身体悪くても、頭悪くても、やればなんとかなる。』　『１、２年生頑張ってきたんや。みんな頑張ってきたんやし、私も頑張れると思った。』

③ ［期待できる自分をイメージする］

『入学時にみんなを巻き込んでいた。最初の気持ちはなんやったん。看護師になりたい思いはあった。自分がなりたいと思うのが一番。』

『なった先のことを考える。ボーナスもらったら、こんな病棟で働いて、怒られてばっかりでない自分を思い描く。』

④ ［周囲の支えに感謝する］

『周りの支え。いろんな人に感謝している。』

『患者さんの思いはその人にしかわからない。でも、わかろうとすることが大事。』

⑤ ［あきらめない］

『自分からあきらめなかったことがよかった。』『自分でやれることはやってしまう。自分で後悔する諦め方はしない方がいい。』

（２）【自己の行動の工夫】

このカテゴリーには以下の７つのサブカテゴリーが存在する。

① ［適度に頑張る］

『そこそこでやっていく。パーフェクトは難しい。』

『頑張りすぎはよくない。ほどほどにバランスをとる。』

② ［健康を維持する努力をする］

『体調を崩さない。もともと身体が弱い。メンタル面も弱い。冬場とか季節の変わり目に体調を崩しやすい。気をつけていた。』

『身体は崩さないように、３年後半はやるだけのことはやった。』

『必死でした。健康に気をつけた。』

『休む時は休む。２年の実習は遠く、ルームシェアをしていた。』

③ ［勉強方法を工夫する］

『家庭があったので、帰るときに頭のなかで整理していた。計画的に学習を進める。実習中は帰って先に計画を立てて、自分の中ですることを決めてやった。』

『どこでつまずくのかそれぞれ違う、実習の計画たてるのが苦手、テストが苦手とか、それぞれ、自分だけが大変じゃない。と思ってできることからする。』

④ ［要領よく勉強する］

『要領よくやらないと。勉強、勉強だと押しつぶされそうになる。』

⑤ ［事前学習をする］

『患者さんが変わったり、小児実習が大変だったが、事前学習でなんとか乗り切れた。』

⑥ ［友人と教えあう］
『年下の子に頭下げて、教えてもらった。恥ずかしいけど。』
『クラスメイトと誰かと勉強している方が記憶に残る　国家試験の前は』

⑦ ［ 自己の責任を振り返る ］
『引き返せへんと思った。3年の半ばでやめられない。生活かかってる。』
『お金借りていたので、頑張らなくてはいけない。』
『奨学金の返済があり、後戻りできない。3年で卒業せんとあかん。』

（3）【支援してくれる人の存在】
このカテゴリーには以下の7つのサブカテゴリーが存在した。

① ［実習のグループメンバー］
『同じ実習にいく実習メンバーに支えてもらった。』
『実習メンバーで助け合う。実習はつらいけど。達成したときは、グッとくる。』
『支えてくれたメンバーもいた。』

② ［友人の存在］
『仲のいい子と不満を言いあい、ため込まず、実習していた。』
『仲のいいクラスメイトと励ましあう。一番は一緒に学ぶ仲間がいたこと。みんなでお互い励まし合いながら、日々のいつもいてる環境が頑張ろうと思えた。』
『クラスメイト誰とでもうまくいけた。いけるように考えていた。』
『学内以外の友達は、なにもわからないけど、それでもいろいろ、聞いてもらえた。』

③ ［家族の存在］
『支えてくれたのは母親「なれるんやったら、なり」といわれた。』
『家族は何にも知らない。どんだけ大変か。一緒にいないからわからない。でも、国家試験受けてがんばれやと言われていた。』
『家族も食事も作ってくれて、3年間応援してくれた。』
『家族が支えてくれた。「お母さん、夜中に泣きながら記録書いてたやん。頑張ってたやん。」っていってくれた。』
『私は一回社会に出た。また学生になっても母がお弁当作ってくれた。母親が支えてくれた。』

④ ［先輩の存在］
『学校に遊びにきた先輩に「今、やってることは無駄にはならない。学生時代やってることは無駄にはならない。絶対に。」といわれた。励ましてもらった。その時はわからなかったが今は看護師になってわかる。』
『奨学金生の集会に参加し、先輩のアドバイスをきいた。顔を合わせると、声をかけていただいた。』

⑤ ［恋人の存在］
『彼女が支えてくれた……一番』

⑧ ［実習指導者の存在 ］
『病棟の指導者さんは、怖いひとばかりじゃなく優しい方もいた。』

⑦ ［看護教員の存在 ］
『先生のサポートも実習中は、安心したり、頑張ろうかなとも思えた。』
『いい先生にめぐりあえたら。いい関係でいられるから』

Ⅵ. 考　察

1．学業継続を困難にさせる要因と学業継続を支える要因

1）学業継続を困難にさせる要因

学業を困難にさせる要因として【実習を通して感じた困難な体験】【日々の学習を通して感じた困難な体験】【学生生活を通して感じた人間関係の困難な体験】の3つのカテゴリーが抽出された。学生時代に学業の継続が困難であると感じた人は、13人中9人（70%）であり、その中でも、実習中に辞めたいと感じた体験をした人は9人（100%）であり、その中の1人は"しょっちゅう実習中に辞めたい"と感じる体験をしていた。看護学生の学校をやめたい理由のなかに実習の困難さがあり[5]看護学生の履修上の最大の課題は臨地実習で[10]、学習上の危機の存在とされている[11]。

【実習を通して感じた困難な体験】は、先行研究と同様に臨地実習が学習上の危機であることを示している。看護学生の実習に関するストレスは強く、この臨地実習が学生の心身の健康を保ちにくい状況を作り出しており[16]、心身の健康は臨地実習中が続くにつれ更に乱れやすい状況になる。学習継続の困難を生じさせる要因ともなる。本研究では実習中に感じた学業困難な体験は、実習中の睡眠不足であった。睡眠不足は実習中の課題の多さによって生じていた。また、実習中は慣れない学習環境による緊張感や、人間関係に疲弊している現状もあった。実習中は人間関係を円滑に調整し維持していく力も必要となってくる。実習中の人間関係の中には、実習指導者や学校の教員、実習グループメンバーなどがある。看護学生の看護師の資格を取りたいという目標は学習継続の大きな原動力となっており、学校を辞めたいと思いながらも、2割の学生が学習を継続していた[17]。実習中の辞めたい体験の中に

実習指導の厳しさが挙げられている。実習中に自分は看護師に向いてないのではないか、看護師になるのを辞めようとかという思いを抱くような怒られ方を体験した人もいた。看護師の資格を取りたいという学業継続の原動力を損なってしまうほどの体験もあった。学生の学習意欲の低下を招き、学習継続への影響について看護師、教員による言語的暴力の体験が関与している報告もある[18]。指導する側が学生の学習意欲を引き出すような実習指導が必要である。また、実習以外にも看護学生が【日々の学習において感じた困難な体験】は、テストの多さ、専門科目の難しさ、勉強に集中できない、座学の続く時期への疲れ、国家試験への不安、他学生への劣等感が挙げられた。入学当初の学習動機の中心は[学習に対する責任の受容」があり[19]、学習動機を維持しつつ、主体的に日々の学習に取り組むことが過密なカリキュラムを乗り越えて学業を継続する力となる。【学生生活を通して感じた人間関係の困難な体験】は、友人との関係、教員との関係、家族との関係、指導者との関係のそれぞれの関係性の保持することの困難性が挙げられた。看護学の看護技術習得過程における経験の特徴として、[学習継続へ向けた仲間との関係性保持]があげられており[20]、学業を支えるためには、その周囲に存在する人との人間関係を保持する必要性も示唆されている。臨地実習において困難な状況にあった看護学生は、その状況と向き合い、何らかの行動を起こすことで困難を乗り越えることができている[21]

2）学業継続を支える要因

学業継続を支える要因として【自己の気持ちのもち方】【自己の行動の工夫】【支援してくれる人の存在】が抽出された。なかでも、行動について、〔勉強方法を工夫すること〕、〔要領よく勉強すること〕、〔事前学習をすること〕といった、学習についての記述だけでなく、〔健康を維持すること〕〔適度に頑張ること〕等健康面に配慮する記述も含まれている。先行研究でも学業継続のために健康的な学生生活を過ごすための指導を検討し、精神的ストレスと身体症状の関連に有意差がみられている[22]。健康を維持するための努力は学業継続の基盤となる。学習を継続の過程で生じる様々な困難状況を受け入れ、乗り越えていくために心身の健康は重要である。教員は、学生の学習状況だけでなく、身体状況にも目を向け必要に応じて指導を行う必要がある。

また、〔努力をすること〕、〔友人と教え合うこと〕、〔経済的な支援を受けること〕、〔自己の責任を振り返ること〕が挙げられている。学生は、実習中に他者の存在が重要であり自分にはなかった考えに気づくことで困難な状況を乗り越えることができるといわれている[21]。本研究においても、【支援してくれる人の存在】として〔実習のグループメンバー〕、〔友人〕、〔家族〕、〔先輩〕、〔恋人〕、〔実習指導者〕、〔教員〕が挙げられた。即ち、学生は教員の存在だけでなく、様々な人間関係を拠り所にして、学業を継続することができている。しかし、臨床実習というよりストレスフルな環境においては、教員のより積極的な、情動への介入とSAT気質コーチング法により、学生のメンタルヘルスが改善し、自己イメージ変容支援が有効であることが示唆されている[24]。様々な背景を持つ学生に配慮しながら、看護教員は学習継続を支援している[23]。看護学生が判断に困った実習場面において、[学習継続へ向けた精神的支援] が教授活動として展開されているが、学生が認識しにくい活動であることが明らかになっているという報告もある。[25] 教員の関わりが効果的になるように学生からのフィードバックを確認し、介入していくことが重要である。

Ⅶ. 結　語

学生は3年間の学生生活を継続するうえで、実習中の困難な体験、日々の学習での困難な体験、学校生活の人間関係における困難な体験等から学業継続が困難と感じていた。しかし、自分の気持ちの持ち方と行動を整え工夫すること、および周囲の人々の存在に支えられながら、学業を継続することができていた。

看護教員は、教育的な支援者としてどのような介入が必要か具体的な検討を深める必要がある。

謝　辞

本研究にご協力いただきました看護師の皆様に感謝いたします。なお、本研究は、2013年度滋賀県立大学大学院修士論文の一部に加筆したものです。

文　献

1）厚生労働省（2010.2012）厚生労働統計一覧　看護師等学校養成所入学状況及　び卒業生就業状況, 2013.10.20, http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/100-1.html.

2）富樫和代, 東條美春, 安藤恵子, 他：3年課程看護専門学校の過去10年間における退学・休学・留年の実態, 中国四国地区国立病院付属看護学校紀要, 第2巻 88-91, 2006.

3）本田英子：看護学生の悩み学校をやめたくなった思いの調査―YG性格検査との関連から, 看護教育, 35, 419-426, 1994.

4）小林民恵,兵藤好美：看護学生のストレスに影響を及ぼす要因，岡山大学医学部保健学科紀要,17－25,2007
5）吉野ひろ子、川田淳子、大竹由美子: 看護専門学校（3年課程）における学生が学業継続をはかる要因,東京都福祉保健医療学会誌，平成20年受賞演題論文，9-16.2009.
6）柴田文子,井上真弓,江藤和子: GHQ精神健康調査にみる看護学生のストレス状況とその背景，第39回地域看護,188-191,2008.
7）大久保暢子,佐竹澄子,大橋久美子他：看護学導入期の学生が感じる困難性の検討,聖路加看護学会,15（1），9-16,2012.
8）宮崎晴佳、増本紘子、岩永喜久子：看護学生の臨地実習におけるストレスと対処行動，第38回日本看護学会論文集（看護教育）48-50,2008.
9）柴田文子,井上真弓,江藤和子：GHQ精神健康度調査にみる看護学生のストレス状況とその背景．第39回地域看護，188,2008
10）渋谷恵子：実習評価への学生の思いとそれを理解した指導・評価の必要性,看護人材教育 2（4） 82-87.2005
11）篠原百合子,澁谷恵子: つまずきやすい学生のためのメンタルヘルスケア,看護人材教育 6（2）83-87，2008
12）臺野美奈子、岡田洋子:臨地看護学実習評価が不合格になり留年となった学生の体験―インタビューを用いた学生時代の振り返りからー，第26回日本科学学会学術集会講演集,173.2006
13）臺野美奈子:臨地看護学実習評価が不合格になり留年となった学生の体験に関する質的研究，第27回日本科学学会学術集会講演集,181.2007
14）米津真紀、佐々木幸子、田中道子他：学校をやめたいという気持ちを実習の中で乗り越えた過程の分析,看護教育18号,268-291,2002.
15）久常節子:今後求められる看護師の資質と教育～20年後の看護職確保の観点から～，社団法人日本看護協会2010.
16）宮崎晴佳：看護学生の臨地実習におけるストレスと対処行動,第38回日本看護学会論文集（看護教育),48-50 2008.
17）鈴木桂子,相原恵,小口なみ他：看護学生の学業継続意志と達成動機およびソーシャル・サポートとの関係,日本看護学会論文集 看護教育 40号,275-277,2010.
18）堂石光美，橋本笑子,三島真由美他:臨地実習において看護学生が体験した暴言・暴力の実態，中国四国地区国立病院付属看護学校紀要第8巻，101-102,2012.
19）西薗貞子：看護大学生における自己学習力の変化の検討：大阪医科大学看護研究雑誌3巻，90-99,2013.
20）吉田三紀： 看護専門学校における学生相談からみた学生のメンタル・ヘルスについて,京都中央看護保健専門学校紀要,第15巻 55-59 2007.
21）佐藤亜月子：臨地実習において看護学生が困難と捉えた体験の乗り越えかたー4年次生に焦点をあててー,日本看護研究学会雑誌，33（3） 2010.
22）江藤和子：看護学生の心身の健康状態の関連性についての検討、第38回看護教育,290，2007.
23）渡邊恵：看護教員が認識する社会人経験のある学生の学習者としての特徴と教育の困難感,日本看護学会論文集,看護教育43号106-109 2013.
24）渡辺洋子：学習継続が困難な看護学生への他者報酬型自己イメージ低減に向けての一事例,帝京平成看護短期大学紀要 22号 25-28 2012.
25）鶴田晴美：看護学生が判断に困った実習場面における学生と指導者が認識した教授活動,お茶の水看護学雑誌，5（1）,25.2010